

シリーズ	行 事 名	実 施 日	実 施 時 間	対 象 (人 数)
室内実習	落ち葉の中のいきものたち	1月19日(日)	13:30~15:30	小学生から一般(30名) 2
	貝化石標本の作り方	2月9日(日)	13:30~16:00	小学生高学年から一般(20名) 2
	落ち葉の中のいきものたち	3月2日(日)	13:30~15:30	小学生から一般(30名) 2
	美術品の取りあつかいと鑑賞	3月9日(日)	13:30~15:00	中学生以上(20名) 2
みどりの工作隊	ウツギの笛づくり	2月2日(日)	10:00~12:00	小学生から一般(30名) 2
	竹で遊ぼう	2月16日(日)	13:30~16:00	小学生から一般(30名) 2
ミュージアムトーク	八丈島のなりわいと移り変わり	1月25日(土)	13:30~15:00	小学生から一般(50名) 1
	種と実のはなし	2月8日(土)	13:30~15:00	小学生から一般(50名) 1
移動講座	阿波忌部の世界	1月26日(日)	13:30~15:00	小学生から一般(50名) 1
	阿波忌部の世界	2月23日(日)	13:30~15:00	小学生から一般(50名) 1
歴史散歩	古墳見学	2月15日(土)	10:00~14:00	小学生から一般(30名) 2
	国府町歴史ウォーク	3月23日(日)	10:00~14:00	小学生から一般(20名) 2
歴史体験	勾玉をつくろう	3月1日(土)	13:30~16:00	小学生から一般(30名) 1
野外自然かんさつ	立川谷の地質見学	3月16日(日)	10:00~15:00	小学生から一般(40名) 2

1は、申し込み不要です。他は、往復はがきでお申し込みください(各行事の1カ月前から10日前までに届くように)。
2は小学生の場合保護者同伴。
詳しいことは、博物館にお問い合わせください。

博物館の学校教育支援事業

徳島県立博物館では、博物館のもつ資源(もの・情報・人)を有効に活用していただくため様々な学校教育支援事業を実施しています。今年実施した事業を2例ご紹介します。

博物館での学習支援

横瀬小学校6年生が勝浦町の歴史を知るために総合学習で博物館を訪れました。展示資料をもとに、学芸員が郷土の歴史や地名の由来を説明しました。



この他にも、博物館資料の貸出や各教科部会の研修の受入などの事業を積極的に行うことにより、学校教育を支援して行きたいと考えています。まずは、お気軽に博物館までご相談ください。

講師派遣(出前授業)

神山東中学校まで学芸員が出向いて、水生昆虫の観察を行いました。学校の裏をゆるやかに流れる鮎喰川に棲む水生昆虫の多様性に生徒の皆さんも驚いていました。



博物館NEWS

博物館ニュース



渡辺広輝筆 祖谷山絵巻(部分)

1828年(文政11)9月、阿波国徳島の藩主蜂須賀斉昌は、西部の秘境祖谷山を巡見した。そのおりの眺めを、お抱え絵師である渡辺広輝に描かせたのが、この「祖谷山絵巻」といわれている。

上の図は、麻植郡桁山(現美郷村・山川町)の風景である。台地の上に点々と見えるのは、三十竈床とよばれる地形で、その向こう、画面中央に高越山がそびえている。下の図は、山中を移住しながら盆や椀など

を作った、木地師の小屋の様子である。筆者の渡辺広輝は、徳島に生まれ、幕府御用絵師の住吉広行に学んだ画家。源氏絵が得意で、有職にもくわしく、松平定信が『輿車図考』を著したときには挿画を描いた。

この絵巻は、楠弘美氏より寄贈されたもので、特別陳列「楠コレクション」(5頁参照)において展示される予定である。(美術工芸担当:大橋俊雄)

絶滅から植物を救うために

小川 誠

環境省は2000年に、徳島県は2001年にと相次いでレッドデータブック（RDB）を出版しました。私はその両方の作成に関わりましたが、出版後も工事の際にそこに生えていた植物が絶滅してしまうケースに何度か直面し、悔しい思いをしています。そこで、どのようにすれば絶滅から植物を救うことができるのかということについて話します。

絶滅から救われたタコノアシ

タコノアシについては、2001年12月に発行された博物館ニュースの45号に「園瀬川で発見されたタコノアシとフジバカマ」として記事にしました。絶滅危惧種の産地を公表することは、採集などにより絶滅の危険が高くなるので普通は行いません。しかし、このケースでは、道路建設や河川改修などの工事で生育地が壊される恐れがありましたので、あえて、ニュースや新聞で公表しました。幸いなことに工事担当者からの問い合わせがありました。詳しく話をうかがったところ、タコノアシの生育地が河川改修により影響を受けることがわかりました。何度か協議を重ねて、できるだけタコノアシの生育地に影響がないような工事手法を取るようお願いしたところ、工事担当者の努力のかがあって、注意深く工事が進められました。

ところが、このタコノアシの生育地を最初に見つけた田淵武樹氏から、タコノアシが埋まっていると連絡がありました。確認したところ、タコノアシの生育地は2カ所見つけていたのですが、かなり離れていて今回の工事の影響がないと思っていた2カ所目の生育地が、じつは接近していて、

堤防の拡張のための土砂に覆われてしまっていたのです。そこで、再度工事担当者に連絡を取り、対策を協議しました。ここのタコノアシはもしもの時に移植できるようにと博物館に持ち帰って栽培していました。今回は埋まってからの時間が短かったこと、時期が4月で埋まった種子があればそれから芽が出る可能性があるため、とりあえず土砂を取り除いて以前の状態に戻し様子を見て、必要であれば苗を移植しようということになりました。

工事担当者や実際に工事をしてくださっている方々のおかげで、土砂が取り除かれ、土の中から冬越しをした地下茎も出てきました。しばらく経つと、その地下茎

や土の中に落ちていた種子から芽が出て、20個体近くのタコノアシが見られるようになり、8月には開花し、やがて結実もしました。環境がこのまま保たればタコ



図2 土砂が取り除かれた生育地 (2002年4月23日)



図1 土に埋まったタコノアシ生育地 (2002年4月9日)



図3 芽生えたタコノアシ (2002年5月14日)



図4 開花したタコノアシ (2002年8月5日)

ノアシはここで生きていくことができます。

このタコノアシの生育地を元に戻す際に、工事関係者のはからいで、土砂をとめる擁壁に石組みを使用しました。すると隠れ家ができ、たくさんのカニたちが定着しました。我々が絶滅危惧種を守る際に注意することは、花壇に植えられた花のようにその植物が生育していた場所と違った環境に植え、その植物を守るのではないということです。タコノアシが生育していた周りの環境を守ることによって、タコノアシを含めてそこに生きるいろいろな生き物たちを守ることを目指しているのです。この場所にはカニ以外にもいろいろな生き物が定着し、徳島県が推進しているピオトープ（さまざまな野生生物がくらす場）となっていくことでしょう。

このようにタコノアシの生育地は守られました。うれしいことに、以前は見られなかった園瀬川の岸边にも、種子で広がったタコノアシが確認されました。種子の供給源が確保されたことによりタコノアシはさらに下流にも広がっていく可能性があります。



図5 復元した生育地に定着したカニ

植物を絶滅から守るために必要なこと

最近、工事関係者と話す機会がよくあります。レッドデータブックが出版されたせいか、彼らの絶滅危惧種に対する感心は高まっていて、工事区内に絶滅危惧種が存在することを伝えると、それを守る対策を積極的にとるようになりました。しかし、植物の研究者や地元の植物について詳しい者はどこで工事が行われているのか、また、どこに開発などの計画が持ち上がっているのか把握しているわけではありません。工事が行われることを知った時点では、予算がすでに決まっていたり、生育地が壊されていたりして救うことができないといったことがしばしばあります。植物の関係者と工事関係者が連絡を取り合いネットワークを組むことにより、こうしたことが減るのではないのでしょうか。

工事関係者に工事の際には植物相に関する調査をお願いするのですが、面積の関係で環境アセスメントにはかからない工事も多くあります。関係者はそうしたものに予算をとるのは厳しいと言っています。そうした狭い範囲での工事でも、事前調査を行う仕組みを作る必要があります。また、植物相の調査が行われても、絶滅危惧種が見落とされているというケースが目立ちます。建物の工事では、要所所で検査が行われ、一定の水準が保たれます。しかし、植物相の調査ではそうした検査がありませんので、形式さえ整っていれば、本来リストアップされなければならない絶滅危惧種が落ちていても、調査を行ったこととなります。事例をあげると、徳島空港に関して行われた環境アセスメントの調査では環境省のRDBで絶滅危惧IB類とされているワタヨモギがリストから落ちていました。徳島市が行った環境基本計画策定のための基礎調査では徳島県版RDBで絶滅危惧I類とされるピロードテンツキが、調査区内に生育しているにもかかわらずリストアップされていません。調査を行ったならその精度を検証する必要があります。

レッドデータブックは作られました。守るべき生き物のリストはできましたが、具体的にそれを守る方法についての施策や規則は示されていません。幸いなことにタコノアシのケースでは、植物関係者と工事関係者の連絡がうまくいったために、絶滅から救われました。このようなネットワークが作られ、法規が整うことによって、一つでも絶滅から植物が守られる事を願います。

(植物担当)

勝浦町今山にある今宮神社の農村舞台は、博物館ニュースNo46でお伝えしましたが、9月28日(土)に舞台お披露目となる人形浄瑠璃芝居や地元の人々による日舞、お手玉、三味線、詩吟等が上演されました。今回はその様子について報告したいと思います。

今山の農村舞台は、「平舞台」から「舟底舞台」に転換できるしくみを持つ「仮設式舟底舞台」という貴重な舞台であるということが分かりました。1月にこの転換機能を実際に試行した時に今山地区の人々を中心に保存会が結成され、この舞台の保存・活用へ向けての動きが始まりました。

当日は、日本建築学会四国支部の主催により、今山地区で「阿波の農村舞台と人形浄瑠璃」というテーマのもと、講演会・パネルディスカッションが行われ、今山の農村舞台の意義や保存活動の状況、今後の指針などが集まった人々に周知されました。その後に実際の舞台お披露目として舟底舞台の形で人形浄瑠璃芝居が約50年ぶりに上演されました。また人形芝居上演の後には舞台の機能をいかし、すばやく床板が組み換えられて平舞台への転換が行われ、子供から大人まで地元の人々が、お手玉演舞、ダンス、日舞や詩吟などを演じました。

舞台のお披露目は、保存会の人員を中心に地元の人々が協力しあって、傷みのひどかった太夫座や舞台の床板や、屋根瓦の一部を応急処置するなどの



図1 上演前に行われた舞台構造についての説明会

尽力によって実現しました。上演時には舞台の周囲には屋台が並ぶなどして賑わいました。集まってきた人々は親、子、孫の3代にわたる家族連れが多く、時には持参の食物やお茶を口にしながら和気あいあいと演目を楽しんでいました。また秋の宵に灯された舞台上の光はとても美しく、地元の人々の努力のかけあって、農村舞台の雰囲気、また舞台が活用される楽しさが、少なからず集まった人々に伝わったのではないかと思います。

舞台の保存については、太夫座のゆがみを直したり、内装、絵襖の補修をする必要があるなどのいろいろな課題がありますが、舞台の活用を今後とも継続できるようにと、保存会を中心に努力が続けられています。

(民俗担当：庄武恵子)



図2 勝浦座による舞台お披露目はじめの式三番叟上演



図3 今宮神社境内に灯った舞台の光

楠コレクションは、徳島県鳴門市出身の楠育治氏(故人)が所蔵されていた美術、歴史などの分野にわたる約3,000点の資料です。本年3月に、夫人である弘美氏より当館に御寄贈いただきました。

それらには、徳島藩主が巡見したおりの眺めを描いたとされる「祖谷山絵巻」(表紙写真)や、光格上皇が修学院離宮に御幸されたさいの行列を記録した「光格上皇修学院御幸儀仗図巻」など、重要な資料がふくまれています。

当館では、いまま楠コレクションの整理を進めていますが、今回、おもな資料を特別陳列として公開します。ぜひご観覧ください。

<おもな展示品>

- 渡辺広輝 光格上皇修学院御幸儀仗図巻(図1)
- 守住貫魚 全国名勝絵巻
- 鈴木鳴門 芭蕉に子犬図(図2)
- 矢野伊章 柿本人麿像
- 仙 厓 茶園詩(図4)
- 尾崎紅葉 俳句短冊(図3)
- 富岡鉄斎 書状
- 棟方志功 大和し美し
- 金島桂華 茄子
- 日野資名 後伏見院院宣



図2 鈴木鳴門 芭蕉に子犬図



図3 尾崎紅葉 俳句短冊

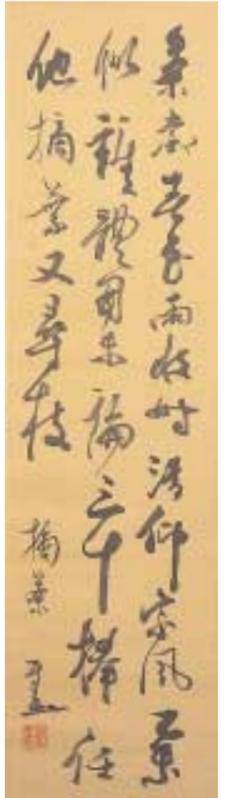


図4 仙厓 茶園詩



図1 渡辺広輝 光格上皇修学院御幸儀仗図巻

開催期間

平成15年1月21日(火)～3月2日(日)

月曜日休館

開館時間

午前9時30分～午後5時

会場

博物館企画展示室

観覧料

入場無料

以西用水の魚類

吉野川の支流・鮎喰川が山から流れ出て扇状地を作っている徳島市国府町には、以西用水という農業水路が網の目のように流れています。この水路が最初に作られたのは、鎌倉・室町時代以前にまでさかのぼるといわれおり、たいへん歴史のある農業水路です。しかし現在では、水路のほとんどがコンクリート三面張りで、しかも中～下流域は都市化の影響で水質汚濁がひどく、けっして魚にとって棲みよい環境とはいえません。ところがこの用水には、メダカやナマズ、カワヨシノボリなど20種以上もの魚が棲んでいるのです。どうしてなのでしょう。

実は、以西用水の取水方法がちょっと変わっていることが関係しています。普通は水門を使って川の水を導水するのですが、以西用水では底樋といって、穴の空いた管を河床に埋め込み、この管の中に浸透してきた水を導水しています。要するに鮎喰川の伏流水を取水しているのです。そのため、透明度抜群のたいへん水質の良い水が、一年中涸れることなく安定して供給されているのです。

さらに、取水した水は、いったん月ノ輪集水池(図1)という小さな池に溜められます。ここから水門を介して何本かの幹線水路に分水されています。この集水池の存在も大変重要です。というのは、以西用水の水路はコンクリート三面張りのため、この集水池が唯一の淵らしい淵となっているからです。淵は魚にとって渇水期の避難所となるだけでなく、様々な種類・様々な成長段階の魚の生息に欠かせないものなのです。

例えば、ウグイ(図2)やカマツカ(図3)、カワムツB型、シマドジョウなどは水路にはほとん



図1 以西用水の源流、月ノ輪集水池



図2 ウグイ(コイ科)



図3 カマツカ(コイ科)



図4 タモロコ(コイ科)

ど生息しておらず、おもに集水池に生息しています。これらの魚は強い水質汚濁には耐えられませんが、現在では下流からの遡上は不可能だと考えられます。以前からいたものが、集水池付近で繁殖を続けながら生き残っているのでしょう。タモロコ(図4)はやや汚れた水でも大丈夫な魚で、下流域にも生息していますが、多いのはやはり集水池付近です。

このように月ノ輪集水池は、以西用水の魚にとってのオアシスといってもよいでしょう。今後とも大切に守っていききたいものです。

(動物担当: 佐藤陽一)

Q & A 「六十六部」とは何ですか？

「六十六部」は六部ともいわれ、六十六部廻国聖のことを指します。これは、日本全国66カ国を巡礼し、1国1カ所の霊場に法華経を1部ずつ納める宗教者です。中世には専門宗教者が一般的でしたが、山伏などと区別がつかない場合も少なくありませんでした。また、近世には俗人が行う廻国巡礼も見られました。なお、奉納経典66部のことを指して六十六部という場合もあります。

六十六部廻国巡礼の風習がいつ、どのように始まったのかは、はっきりしません。縁起としてよく知られているのは、『太平記』巻第五「時政参籠榎嶋事」です。北条時政の前世は法華経66部を66カ国の霊地に奉納した箱根法師で、その善根により再び生を受けたと説くのです。また、中世後期から近世にかけて、源頼朝、北条時政、梶原景時など、鎌倉幕府成立期の有力者の前世を六十六部廻国聖とする伝承が定着していました。これらは、六十六部廻国巡礼の起源が関東にある可能性を示唆しています。

史料的には、13世紀前半にすでに六十六部廻国が行われていたことが確認できますが、いつまで遡るのかは不明です。さかに行われたのは室町時代以降、とくに近世でした。

六十六部廻国聖による納経は、その名の由来どおり1国1カ所が原則的でしたが、なかには1国内で66カ所をめぐった簡略形もありましたし、逆に1国66カ所を66カ国にわたって納経した例もあります。いずれにせよ、固定された納経霊場がないのが特徴でした。

次に、六十六部廻国巡礼と阿波との関係を見ておきましょう。阿波における六十六部の痕跡は、中世末期の16世紀にまで遡ることができます。県外所在の資料では、島根県大田市南八幡宮鉄塔検出の銅製経筒群(16世紀)に、阿波在住の六十六部廻国聖が廻国していることを物語る銘を持つ経筒が見られます。また、奈良市中之庄経塚出土の納経請取書(承応2~4年[1653~55])には、西国36カ国の六十六部廻国霊場が見られ、そのなかに阿波国那西郡の大瀧寺(阿南市の太龍寺)が確認されます。一

方、県内所在のものでは、次のような事例があります。三好町馬岡神社の享禄2年(1529)銘の棟札に「本願六十六部越後国心海」とあったり、穴喰町願行寺の天正18年(1590)銘の山越阿弥陀三尊浮彫板碑に「為奉納大乘妙典経六十六部供養」等と見えるのが、かなり古いものとして注目されます。

時代が降って、近世の六十六部廻国巡礼に関しては、六十六部廻国供養塔などの石造物が少なからず見られます(図1)。こうした石造物の銘には関係者の名前や地名などが刻まれているので、実際に六十六部廻国聖がどのような行動をしていたか知るための有力な手がかりになります。

また、廻国巡礼の道具などが残されていることもあります。当館では、鳴門市在住の盛博さんからお預かりした近世の巡礼資料を保管していますが、その中に六十六部廻国巡礼の笈や納札があります。

六十六部廻国聖の事例は断片的なものが多く、今後の調査蓄積が期待されるところです。廻国供養塔などは、身近に見られるかもしれません。皆さんも調べてみてはいかがでしょうか。

(歴史担当: 長谷川賢二)

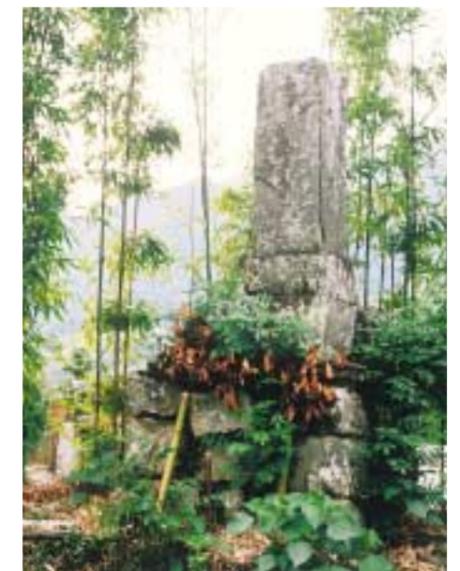


図1 井川町西井川の廻国供養塔